東京片貝会報

発行所
東京片貝会
中央都日本橋江戸橋1～9
化学工業技術同友会内
電話（271）1922

郷里からも多数の参加者 賑かに第九回懇親総会ひらく

"ミッコンジイサン"に大よろこび

新緑に初夏の太陽が眩しい真夏をおもわせる暑さである。第九回の懇親総会は去る昭和四十三年六月九日（第二日曜）上野おかち町駅前の吉池食品デパートの八階集会場で開催された。

この日十時の開館をまって役員の人たちが馳せ参じ、会場の準備や余興の舞台づくりに懸命に働く。十一時過ぎごろから受付に会員たちが晴れやかな笑顔をみせはじめる。

正午には椅子席が一二〇、相当数の補助椅子をもち出しても、まだ座席が間に合わない仕末、即席の苦心で舞台の前面にカーペットを敷き婦人連中に坐ってもらい急場をどうにか凌いだ。立錐の余地もないというか、参会者一六〇名におよぶ総会はじまって以来の大盛況である。

午後一時安達市郎さんの如才のない司会で開会する。安達龍作さんが役員を代表して挨拶を述たあと、幹事長の小林敬司さんが、会計、事業経過や計画、ならびに仲使山（招魂場）公園整備開発、郵塚、中学同窓会などについて、明快かつ要領をつくした説明報告をおこなう。それより来賓祝辞に移り、郡司中学校長、小林文雄さん、佐藤佐平治さん、その他それぞれの所懐が披瀝されたが、そのあとをうけて藤塚太郎さんから閉会の言葉を結びに定例総会を終了した。

そこで参席者一同に、折詰、寿し、果物、菓子、酒、ジュースが役員たちの手から配られ、佐藤佐平治さんの音頭で一斉に杯をあげ乾杯して余興の幕をひらく。

い組のお祭り絆天に手拭ハチマキ姿の翁手踊の一行が正面に勢ぞろいすると、小林幹事長のおひろめがあり、つぎに一行の世話係り相崎富一さんが、笛や太鼓などシャギリの持場をはなしながらメンバーを紹介する。なにしろ当年八十五才になるという相崎老人は曲った腰をのばしながらユーモラスの愛嬌をふりまく場面もあり、笛や太鼓、鉦のシャギリが威勢のよい歓声につれて場内にこだまずると、舞台の翁人形がにわかに呼吸を吹き込まれたように軽妙な手踊りをはじめる。

さすが五十余年きたえられた相崎老人の至芸に、参観者の多くは数十年ぶりの回想を呼び起しておもわず感歎の声をもらす。

かかるところへ北越銀行招待の片貝上京組がドヤドヤと十名ばかり参加して、場内は一段と賑やかさを加える。東京小千谷会々長の小川国松さんがおくれて顔をみせこの盛会ぶりにビックリして感想をのべる。

（盛大な総会風景、万才三唱）

ミッコンジイサン（翁手踊）の演芸は、広大寺、追分、出雲山、おけさ、品玉、その他のプログラムで進められ、感激ムードはいよいよ高潮する。アルコールにハッスルする会員同志の懇談、親睦の献酬はしきり、それぞれ友達を求めて交歓の杯を重ねてゆくうちに恒例の盆踊るがはじまる。

そろそろ定刻も近づいたので四時半過ぎ、安達基吉さんの発声で東京片貝会の万歳を三唱してめでたく閉幕した。

なお名残り惜しみ去りやらぬ会員たち三々、五々、会場のあちこちで一組となり、酒杯を傾けていたが五時すぎ散会した。

中学有志会と就職事情懇談会

当日は総会に先だち午前十時ごろから片貝中学校の先輩有志が約十五、六名参集し、郡司校長を中心に東京支部設置につき協議会を開催し今後の結集の申しあわせを行なった。

また別席で同中学の就職係りの阿部金一先生の斡旋で成年式前（二十才）の中学就職者たち二十名ばかり参席し、就職の現状、将来の希望などについていろいろ感想をのべあい、懇親のうちに一層の健闘を激励して散会した。

当日の出席者名、寄付金、収支等は左記の通り。

（翁手踊（ミッコンジイサン）の舞台）

第九回懇親総会出席者
（順不同・敬称略）

来賓＝小川国松（東京小千谷会々長）横山勲（元片貝小学校教諭）

片貝町側＝郡司哲三、阿部金一、小林文雄、安達基吉、佐藤佐平治、吉原寅市、山村理策、佐藤正雄、本田彦治、南波謙一、山口宏、石上新吾、石上きく、大刀川四郎、大塚太郎、吉田（柏屋）、阿部清吉、吉井清市、相崎哲、安達良一、安達伊之七、本田洲平、相崎富一外七名（翁手踊おはやし連中）

会員＝相崎政弘、安達市郎、安達宗吾夫人、安達道宗、安達龍作、安達かう、安達ヒロ、新野今朝二、新野次朗、新沢須美、苧川とし、石田定子、石黒佐忠大、内野アツ、大内登世、吉原ヨシ、大矢修一、大矢福次、小川茂雄、小川セキ、小野塚次郎、岡キヨ、神林徳次、同条子、気田登美、日下部政子、黒崎せき子、小林敬司、同サウ、小宮良夫、小宮孝作、佐藤正雄、佐藤フミ、佐藤フサ、酒井美代子、品田重治、高橋かづ、同寛、高橋寿美、高橋千代子、高橋みさ、太刀川達太郎、大刀川藤吉、谷内忠太郎、鶴田国茂、塚本美恵子、早川松太郎、原田千代野、馬場きい外一名、平石正典、福井かつ、藤塚栄三郎、藤塚太郎、松井重治同夫人
丸山貫司、同喜久子、丸山茂、丸山フジ、丸山松江、丸山春、三重堀繁蔵、諸橋武之助、山口富次、山口国次、山口三郎、山口よし、山田せし、山田雅子、山田京子、吉井秀七、吉井マス、吉原栄太郎、同ヨキ、吉原伸治、渡辺佐武郎、若井やう、和田房枝、本田政秀、浅田きせ、安達清次、大矢みよし

（同舞台裏オハヤシ連中）

藤田睦子、武藤睦子、山口タツ、浦辺シゲ、安達ナカ、五十嵐キヨ美濃村ヤウ、木内タケ子、田口加代子、渋谷ヨシ、浅村のぶ、清水六郎、吉原セツ、堀田ふみ、須藤文子、黒崎ネイ、宗村ミツ、平沢サウ、桑原沙紀子、丹治キミ、相崎ヨシ、青木富代、井上富貴子、石原ミツ、小宮八重、中島イツ、根岸フサ子、古谷野ミイ、松山フサ、外に片貝中学校同窓会員（十六名）事務係長長谷川、計一六一名

なお左記の方々より祝電、寄付金および寄贈品がありました。

寄贈品＝衆議院議員、田中角栄氏より清酒五升のご寄贈がありました。ほかに小宮良夫氏より録音テープ

祝電＝参議院議員石井桂氏、片貝小学校吉田校長

寄付金＝相崎勇次郎、長谷川江津、若林きい子（以上欠席）安達宗吾、新野今朝二、小川茂雄、品田重治、鶴田国松、塚本美恵子、福井かつ、藤塚栄三郎、藤塚太郎、三重堀繁蔵、諸橋武之助、山口三郎、山田雅子、吉井秀七、若井やう、大刀川達太郎（以上二十名順不同・敬称略）

本総会の収支は左記の通り

来賓よりの寄付金合計二万七千円、同窓会々費八千円、一般寄付金四万五千四百円、大会会費十一万二千円、年度会費二万三千六百円、合計金二十一万六千円也、支払合計十六万三千二百十四円也、差引残金五万二千七百八十六円也（但し年度会費二三、六〇〇円を含む）は一般会計へ繰入れました。

三尺玉花火の打揚げ記念碑

大正十年卒業生が還歴祝で

昨年（四十三年）還暦を迎えた大正十年の片貝小学校卒業の同級六十六名が、記念事業について相寄り凝議した結果、後代に残るものをとの趣意から、かつて明治二十四年九月の秋祭りに打揚げられた日本最初といわれる三尺玉花火を偲んで記念碑を建立することを決め、約四十余万円を醵金して、昨秋の九月九日盛大に除幕式を挙行した。

この碑はみかげ石、佐久石、三波石を三段につみ重ねて台座とし、この上に高さ四尺の磨きあげた仙台石を立てた見ごとなものである。碑の表面には郷土史家浅田壮太郎さんの筆になる「煙火三尺玉発祥之地」なる文字が刻まれ、裏面には「明治二十四年九月九日の浅原神社の大祭で日本最初の大煙火三尺玉を打ち上げた。これを記念するため、大正十年卒業生一同が還暦を祝ってこの碑を建てる」と記されている。場所は浅原神社境内二の鳥居手前、みたらし前の右側。

（三尺玉 花火発祥の記念碑）

片貝城趾等管理委員会

昨春、片貝城趾、仲使山一帯の観光資源の保護、管理のためこのほど小千谷市より委託を機会に片貝城趾等管理委員会が設立された目的および委員はつぎのとおり。

一、本会は片貝城趾及び仲使山の史跡及び風致の保護等に関する総合的施策の樹立について必要な事業を行ない、もって郷土遺跡の尊重啓発をはかることを目的とする。

二、本会は前条目的達成のため次の事項を行なう一、城趾等の観光資源総合開発、一、不動産の管理、一、施設及び物件の維持管理、整備、一、その他管理運営。

本会の規約発足は昭和四十三年四月一日より施行する。以下略

委員長・佐藤佐平治、副委員長・友田清三郎、同・本田善治、委員・吉井遊吉、大塚太郎、堀井与、鈴木巌一、安達鉄太郎、新野武、小宮初太郎、大矢三重、浅田壮太郎、山口正夫、宮島孫三、谷内清、大矢賢三、安達允、吉原貴市、俵山瑛、（順不同）以上。

大小ご宴会
ふぐ・天ぷら
割烹 升本
塚本美恵子
東京都江東区亀戸町4～15
電話 東京（681）0496・5848
国電亀戸駅より大通四つ角三和銀行隣り

奥湯河原温泉
政府登録第210号国際観光旅館
仙境 野天風呂 青巒荘

お申込は 電話 湯河原（04606）代表 3111～6
直営東京案内所 電話（712）4622
日本交通公社、小田急各案内所

皮革一般 靴材料卸
株式会社 堀井商店
本社 東京都台東区浅草今戸2丁目32―16
電話 東京（873）1156・1157番
工場 東京都台東区浅草今戸2丁目31―1
電話 東京（873）0056番

在京者のまごころをこめて 仲使山休憩所の贈呈式

壮厳なのりとで開幕

東京片貝会有志の故郷へおくるまごころをこめた建造物（炊事施設のある休憩所）の贈呈式が、昭和四十三年十月六日（日）小千谷市当局、地元有志、東京からの帰省会員など約五十余名が参席してゆかり深い仲使山招魂場の忠魂碑の前で午前十時半、おごそかに心あたたまるふんい気のなかに挙行された。

この日、昨日の秋晴れの好天気にひきかえ夜半から小雨がハラツキ朝またき雨模の去来がしきり、ときおり明るくさしこむ陽ざしに好天気を祈りながら、八時半日曜日を返上した支所員たちの奉仕で紅白のまん幕がはられ忠魂碑前には山海の供物が捧げられて会場の準備が進められた。

雨脚を気づかいながら来場される地元有志たちは段々に参列参会のいでたちである。

あいずの煙火があがると、小林敬司幹事長の司会で開会の言葉があり、贈呈式の幕をひらく、これに先だち忠魂碑の前で吉井元吉神官がうやうやしく拝礼してのりとを奏上する。朗々とした斎声は静かな山気に流れて参列した全員は粛然として頭をたれて平和の黙祷を捧げる。修祓の儀がすむと、安達龍作東京会々長から市長代理神保収入役の手に建造物の小千谷市への贈呈状がおくられ、次に工事請負人の本田国次さんへは感謝の記念品が贈呈された。

木の香新しい建物の入口の扉には赤と青のテープがはられ中央にピンクの飾花がつけられてある。左側に安達会長、右側に神保市長代理が同時にはさみを入れると一斉に会場に拍手がわきあがる。ここにめでたく現物の引渡しをおわる。

これより東京側代表として安達会長は、松井助吉さんの会員名簿作製にはじまる戦後の東京片貝会の創立経過、山口慶吉さんの筆塚地域の観光開発、吉原三郎さんの桑参道ならびに仲使山公園整備に関係した故人たちの悲願を語り、将来この地が若き世代の人間形成と都会人と郷党を結ぶ人間交流による片貝の諸経発展の場とならんことを熱望してあいさつをおわる。

つぎに神保市長代理は懇篤な言葉で市長の意を伝え、今後の管理委員会の活動を期待すると丁重な所懐をのべ、また小千谷市議会の瀬川議長は東京片貝会の郷里によせるあたたかい心情をたたえ、この記念建造物の利用を通じ、一層その親和の交りが深まることを希望すると祝辞をおくったが、塚木の詠じた「ふる里の山にむかいていうことなしふる里の山は有難きかな」を引例して思郷の人びとに深い感銘を与えた。

地元側から友田清三郎氏（片貝町協議会々長・片貝城趾等管理委員会副会長）は熱意に溢れた素朴な祝辞をのべ、あとをうけて吉井進吾市議会議員は要領を得た簡潔な閉会のあいさつを行ない、同氏の音頭で一同万才を三唱して晴れの式典を滞りなく終了した。ときに十二時。

（忠魂碑、修祓の儀）

これより野外に用意された宴会場で一同あぐらにくつろぎ、祝杯をあげ親睦会にうつる。この時自動車でのりつけた地元青年たちのシャギリが興を添えて賑やかな気分が高潮する。

あいにく降り出した雨がしだいに勢をまし沛然とした豪雨にかわる。しばらく雨宿の下で酒杯を汲んだが、しかたなく野外天幕や新築休憩所などで三々五々分散して雨やどりをするうちに心づくしのきのこ汁のサービスがはじまる。なかには幾杯もおかわりして故郷の味をたんのうするものもあった。野外親睦会は惜しくも雨に見舞われて好機を逸したが、東京片貝会の意図する趣旨がよく郷党人にも理解され、今後の協力発展を約して一時ごろ散会した。

（贈呈状、安達会長より小千谷市長代理へおくる）

贈呈式の参列者、前列左から安達会長、神保市長代理、瀬川市会議長

筆塚展望所を訪れる

午後一時すぎ東京片貝会員を中心に地元有志が加わり、支所で仕立てたマイクロバスに乗車し小雨降りしきる中を筆塚展望所にむかった、頂上は綺麗に雑草が払われて、行き届いた整地が行われて、故山口慶吉さんの意を伝えた風趣ある掲示板が建てられていた。展望する仲秋の故山はいまだ紅葉には早く小雨にけむり、もことした視界の中にあったが、この地はさきの仲子山とはまた趣きを異にしかったつとしてひらけた自然の風光は明るく将来の観光地域として望ましい思いにひたった。

筆塚見学の帰途一同は管理者山口太一郎さん自宅二階広間に集合し、さらに会場からかけつけた数名を加えて、すっかりと腰を落ちつけて日暮れるまで、民謡や甚句などそれぞれ自慢ののどをひろしながら酒杯を汲みかわし親睦の歓をつくした。

当日東京よりの参会者次の通り（順不同）

安達龍作、丸山賢司、小林敬司、佐藤正雄、吉井マス、若井やう、安達ヒロ、横山松代、同伴者一名、長谷川、以上十名。

右贈呈式における収支は次の通り。

会費一人五百円、十一人分五千五百円也は直接支払済み。ほかに寄付金二万九千円ありました。

式費用一万九千五百円、休憩所備品二万一千九百四十三円、雑費九千六百円、旅費二万三千円、合計五万三千四十三円、差引三万四千四十三円也は募金会計より支出しました。

（故山口慶吉さんのゆかりの掲示板）

片貝仲使山公園整備協賛会募金の件

東京片貝会の有志が発起人として去る昭和四十二年九月発足しました本協賛会の募金は会員各位の熱心なご協力と、郷土によせる心あたたまるご寄付金は、昭和四十三年十二月末までに応募者数が百十五名、金額四十六万九千五百円に及びました。よって昨年十月六日（日）別記の通り建造物の贈呈式をめでたく挙行致しました。次に右収支決算と、ご寄付者芳名を列記致します。

片貝仲使山公園整備協賛会収支

募金総額金　四六九、五〇〇円（一口五〇〇円九三九口、一一五人）

支出

二三九、七四五円	工事費全般
七一、五五〇円	水道工事費
二〇、〇九五円	参道補修費
四七、六三三円	贈呈式費その他雑費
一七、六四七円	通信費
一〇、六五〇円	印刷費
一八、二五五円	事務費、雑費、会合費、その他
四、三五五円	振替手数料
合計	四一九、九三〇円也
差引残高	四九、五七〇円也

右の通り収支報告致します。

昭和四十三年十二月末日

仲使山公園整備協賛会

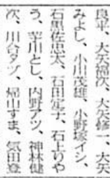
（筆塚にて安達会長）

ご寄付者芳名（敬称略・五十音順）

相崎与次郎、浅田幸一、浅田松美、浅田六郎、安達市郎、安達宗春、安達忠次、安達徳太郎、安達道宗、安達ヒロ、安達友治、同ユウ子、新野今朝二、安達龍作、阿部ふみい、五十嵐松治、大塚藤四、大塚文雄、大塚たけ、大塚レイ、大矢良平、大矢福次、大矢修一、大矢みよし、小川茂雄、小野塚イシ、石黒佐忠太、石田定子、石上りやう、笠川とし、内野アツ、神林健次、川合タツ、桐山すま、気田登美、黒崎敬五郎、黒崎明、黒崎熊太郎、黒崎せき子、黒崎スイ子、日下部政子、桑原沙紀子、小林敬司、小宮竹次、小宮幸雄、小宮良夫、小宮栄作、佐藤正雄、佐藤はる、佐藤フサ、坂部慶晴、竹森ゆり子、芝桂七、品田軍治、島峰徹郎、鈴木チエ、高橋忠雄、高橋覚潤、高橋喜美子、高橋千代子、大刀川進太郎、大刀川勝有、鶴田国茂、鶴田リツ、塚本栄惣子、永井正雄、長野チイ子、西沢鍵二、早川松太郎、長谷川ウメ、長谷川江津、長谷川スミ、林チヨ、原田千代野、広井三代次、平石正美、藤塚太郎、藤塚栄三郎、堀井かつ、本田竹次、堀井貞之助、松井重治、丸山賢司、同寿久子、丸山佐ん、丸山茂、丸山松江、丸山ハツ、丸山フジ、三重掘繁蔵、三井ミヨ、山口俊頃、山口富次、山口三郎、山口僕、同タツ、山口俊治、同ヨシ、山田雅子、山田せい、山田京子、吉井マス、横山松代、吉原周治、吉原功、同セツ、吉原三代治、吉原秀司、吉原菊司、若井やう、若林きい子、和田力子、和田房枝、以上一二五名

（筆塚展望所にて）

山口桂資さん急逝
民生功労で表彰



山口新聞店主、山口桂資さん（片貝町一ノ町）は昨秋十月二五日、日比谷公会堂で開かれた全国社会福祉大会で民生委員としての多年にわたる功績が認められ、栄誉の表彰状と記念品を授与された。

山口さんは明治三十三年一月十七日生れ、消防団副会長、町議員、人権擁護委員、地区老人クラブ副会長など歴任したが、惜しくも昨年十二月三十日急逝した。

活魚とふぐ
大小ご宴会
和田兼
東横線綱島駅前（協和銀行前）
電話（531）2375
自宅　杉並区和田3丁目1の24　電話（311）5050　和田力子

鮪種専門
株式会社　富春商店
売場　東京都中央卸売市場内（2023）電話直通（541）9138
福井カツ

長尾優著

歯学振興の殊勲者

「島峯徹先生」について

安達龍作

「島峯徹先生」の伝記出版のことは、かねてから耳にしていたが、昨秋養嗣子の東京医科歯科大学教授（病理学）の島峯徹郎博士から、その一書を贈られたので、片貝となじみ深い故人の紹介かたがた若干の書評を試みることにした。

（大正十三年ドイツ留学時代）

著者、長尾優博士は島峯先生とは東京高等歯科医学校（昭和四年）創立当初から盟友で、島峯校長のあとをつぎ同校の校長となり戦後、同校が東京医科歯科大学となるや初代学長となられた。当年八十二才である。

長尾博士は「あとがき」に伝記執筆の心構えとして「自分の主観を述べないで、つとめて資料を基とし、これを適当に配置して先生という〝人〟をできるだけ髣髴（ほうふつ）せしむるよう努力したつもりだ」と記しておられる。

何分にも高齢者であり、この種伝記についての未経験者であることを断っておられる。したがって一般に流布されている伝記体ものとはやや趣を異にしている。

とくに故人と関係深い東京高等歯科医学校の卒業者、親近者以外には、読書欲をそそる魅力には欠ける嫌いがあろう。巻末に添付されたドイツ語の医学研究論文（一〇〇頁）のほか全文（二五五頁）のうち、繙いてみると片貝のことがらが約⅓を占めているのには一驚した。この事実は、故人が生前言葉のはしばしに語られた少年の日の片貝が、しらずの間に長尾博士に深い感銘を与えていたことの証左ともみてよかろう。

島峯先生と片貝

島峯先生は明治十年（一八七七・西南戦争）四月三日、越後刈羽郡石地（越後鉄道沿線）で悔斎（父）の長男として生れた。（はしなくも隣家がのちに日本石油会社の社長となった内藤久寛さんの実家であり、これが縁となって医学生時代同氏から学費の援助をうけた）

島峯家は代々長岡藩の典医であった。祖父の伝庵は、戊辰の役にのぞみ、長岡藩の攻防戦に際して不出世の偉傑藩師河井継之助が戦傷の身を戸板にのり会津に逃避行したが、そのおりこれに従って看護につとめたといわれている。（伝庵当時六十三才、父の悔斎は二十二才になっていた。）

敗戦による長岡藩の離散で、一時前記の石地で六、七年間にわたり医師を開業したが、家計振わず明治十五年ごろ佐渡鉱山病院長となり約三年間相川にあった。（次男正氏が出生）同地の勤務を終わり、再び長岡に帰り神田町に開業したが、家計いよいよ不如意となり困窮した。先生九才のおり佐藤雄四郎さんの斡旋で、当時無医村であった片貝村に一家をあげて移り住むことになった。二ノ町で開業したが、明治二十二年五月、長岡西神田町から本籍を片貝に移して晩年に至るまで三回にわたり居を変えている。悔斎は生来酒好きで、酒興湧けば必ず一席を弁じて人たちを煙にまいていた。

徹先生が小学校三年の時、片貝小学校に転校してきた。なかなか強情、腕白で茶目気があり、つねに餓鬼大将をもって任じていた。同窓に安達修吉、安達貫松などの親友がいたが、終生かわらざる友情で結ばれ、これらの人たちが徹先生を片貝へ引きつける磁石の役割をはたしたわけである。（書翰参照）

学業成績は優秀で常に上位を占めていた。長岡中学から新潟中学に転校した。当時県立中学は新潟中学校のみであった。

明治二十五年同校を卒業（二十才）上京して海軍兵学校の入学試験をうけて及第したが、父の反対により入学を中止した。ついで金沢の医学専門学校に学んだが、在籍一年にして第四高等学校に入学した。

このころより父悔斎は結核にかかり、三十一年一月、五十一才で片貝でその生涯を終った。徹先生の一生を通じて、このころが貧困に喘えぎ、自らも病患に悩んだ苦闘時代であった。

寡婦となった母シゲ女は、他家の手伝婦をやったり、島森に掘立小屋をたて乳牛を飼育して乳をしぼり、これを配達して遺児の養育に心身をすりへらした。

この年の暮に先生が金沢から借金の詫状を片貝の債主に送っているが、その悲壮な心境が偽りなく吐露されていて同情の涙を禁じ得ない。そこに後年の徹先生を鍛えあげた不屈の精神と人間形成への貴重な体験が充分に窺われる。

夏休みなどで片貝に帰ると、牛乳配達をやったり、まだそのころ珍しかった写真機を借りうけ、人びとを写し、何がしかの報酬をもらいうけて学資の足しにしたのであった。

明治三十四年六月、四高を卒業して東京大学医科大学に入学した。明治三十八年に東大を卒業すると養育院に勤める傍ら大学院に学び、小石川大塚に家を持ち母と一緒に暮した。明治四十年、先生がドイツ留学に旅立つと、母、正（次男）、悔（三男）らは牛込下宮比町の内藤久寛別邸に留守番となり住みこんだ。そのうち大正元年正さんが結婚したので、暫く薬研堀田野家の借家に移ったが、大正三年に徹先生が帰朝されたので江戸川端石切橋に家を構えて母君と生活を営んだ。

徹先生がなぜ歯学の道を選ばれたかは、当時不振であった歯学を振興せんとする深い志望から出たのは勿論だが、また長岡出身の恩師である小金井良精先生（東大教授）と庇護者である内藤久寛氏の賛成によるものと推測されている。（ドイツ留学のことは紙数の関係で省く）

東京高等歯科医学校長となる

滞独の七年に及ぶドイツ留学から帰朝後、東大講師となったが、文部省の「歯科病院」が設立されるにおよび院長となった。これより先生が順風に帆をあげ、独自の道を歩くことになる。

病院長として活躍する傍ら文部省高官たちに機会あるごとに、歯学振興の必要を説き、欧米先進国の実状を紹介して、国立専門学校の設置を勧請したのであった。昭和三年十月、「東京高等歯科医学校」の設立が公布され、学校長就任の発令をみた。

そのひたむきな熱情は、遂に多年の宿願を達成したのであるが、徹先生は名実ともに同校の生みの親となったのである。

酒徒行状記

東京高等歯科医学校の門弟たちにいわせると徹先生は「織田信長」であったと寸評している。同校にとってのワンマン的存在であったことは事実であろうが、性格的には温厚まどろかとは反対で、さいりなきびしい半面があったものとおもわれる。しかしこれはあくまでも公的なものであって、私的な交りでは如才がない親和的なものが漂うていたようである。

片貝にある竹馬の友におくられた手紙などをみると、こまやかな配慮や秘められた素朴な感情がよく汲みとれる。

独身主義者として人生を貫かれたが、それは長い独逸生活によって、結婚適齢期を逸してしまったのが最大の原因かとおもう。また適当な配偶者に恵まれなかったことにもよろう。

愛酒家として知られたが、これは父悔斎からの遺伝的な因子によるところがあろう。また家庭的な安息にひたる機会が乏しかったので、日頃の鬱積した苦悩を発散する手段として沈湎したのが、いつか慣い性となったのではなかろうか。少年時代のなつかしい追憶の場として、終生片貝の風物が頭から離れなかったのもこの辺りにつながりがあるようだ。

晩年はさらに孤独感を紛わすため、糖尿病でありながら酒杯を遠ざけることができなかったのではないか。

またその酒席は芸妓たちを侍らして興じる、はなやかな陽気のものであったといわれた。

昭和二十年二月十日、敗戦の悲報を知ることなく、新宿区下落合（目白文化村）の自邸で逝去された。享年七十才であった。

死後解剖知見によると膵臓は常人の半分に萎縮しており、ランゲルハンス島（インシュリンを分泌するところ（男性ホルモン）は痕跡すら認め難かったと報告されている。巷間伝説となっている異性間の交際などは案外に淡白なものであったかとおもわれる。

島峯徹先生の歯学界に残された業績は数多いが、とにかく初期には技工士的の域を脱皮しなかった歯学を内容的にレベルアップして一般の医学と比肩し得る学問的領域をひらかれた最大の殊勲者であることは万人の評価するところである。また不遇の中にあって島峯徹先生を育てあげた母堂シゲ女史の深い愛情にこころから敬意を表したい。

惜しむらくはこの書の巻末に掲記された先生閲歴に、年令記入がないのは、まことに画竜点睛を欠くの憾みがある。（43・12・31記）

青年層を交え新年宴会
流行歌手の民謡に賑う

昭和四十四年度の新春有志懇親会（新年宴会）はおそまきながら一月最終の日曜日、二十六日正午から国電おかち町駅前、吉池の七階で盛大に開催した。

恒例の新年有志懇親会は久しく亀戸の「升本」で開いてきたが、今回は若い世代層への参加呼びかけと仲使山公園整備記念事業寄付関係者に対する中間報告をかねて会場を変更した。

この日ドカ雪の越後とはひきかえ東京はぬくもりすら覚える好天気であった。正十二時から受付開始、クラス関係有志連など約半年ぶりの顔合せである。一時半安達市郎副会長の司会、如才のない挨拶で開会、安達龍作会長から昨秋十月十日、郷里片貝仲使山招魂場で挙行された休憩所（炊事場付）の小千谷市（片貝城址等管理委員会）への贈呈式行事、野外宴会、筆塚展望山の模様など、また十一月には一ノ丁、寺町老人クラブ奉仕になる桜苗木の植樹の様子などが報告された。（この間佐藤正雄さん撮影のスナップ写真の同記念アルバムが回覧された）

ついで小林敬司幹事長から今後の東京片貝会運営についてクラス会事務の片貝会事務局委任や、片貝中学卒業者を中心とする青年部設置について提案があり一同拍手をもって賛意を表した。

これより藤塚太郎副会長の音頭で酒杯をあげ乾杯して宴会の幕をひらく。

流行歌手の民謡で一同ご満悦

折詰料理の口とり、寿しをさかなに酒席が高潮した午後二時半ごろ、はからずも奇篤な有志のサービスで、クラウンレコードの流行歌手安藤由美さんが出演、三味線太鼓の伴奏で民謡や流行歌を約三十分つぎつぎに美声をはりあげ熱演したが、「日本一、大統領」など熱狂したカケ声も連発され、一同ウットリ。なかでも満場の人たちに一段と興を添えたのは、わずか三才のつよし坊やの太鼓たたきであった。あどけない可愛い顔で上手に間をとりながらの巧みなバチ捌きにみんなの口からおもわず感嘆のためいきがもれた。

余興がおわった後も豊富な酒、ジュースでたのしい話題につぎつぎと花が咲き、各自テーブルを回って親睦をかさね四時半ごろ名残りの幕をとじた。

当日の参会者次の通り。（五十音順）

相崎善次郎、相崎政弘、相崎勇次、安達市郎、安達宗吉、安達ヒロ、安達龍作、新野今朝二、新野次朗、阿部修次、石黒佐忠太、芹川とし、浦部茂子、大矢良平、大矢テル、大塚たけ、小川茂雄、黒崎せき子、小林敬司、小宮良夫、佐藤正雄、佐藤文次、佐藤フミ、芝三四司、芝五郎、鶴田国茂、長野れい子、早川松太郎、原田千代野、広井三代次、藤塚太郎、藤塚栄三郎、藤塚トメ、福井カツ、丸山茂、丸山松江、丸山春、皆川せん、山口三郎、山口富次、山口タツ、吉原伸治、渡辺左武郎、若井やう、和田房枝、事務係長谷川

来賓・本田増治（市議）松井喜平太（組仁）山口正治（農工社）以上五十名。

なお寄付金を頂いた方々は左記の通り。（敬称略）

安達市郎、安達宗吉、新野今朝二、石黒佐忠太、浦部茂子、大矢良平、小林敬司、鶴田国茂、広井三代次、福井カツ、丸山茂、若井やう、丸山貴司（欠席）、小川茂雄（果物一箱）祝電＝依山猛片貝支所長、

当日の収支は次の通り。

会費・四九人分＝四万九千円、寄付金・十二人分＝二万八千五百円＝合計七万七千五百円、支払・吉池支払＝四万九千二百九十円、雑費三百八十円、合計四万九千六百七十円也、差引残金二万七千八百三十円也は一般会計へ繰入れた。

以上

（安藤由美さんの美声にきき入る会員たち）

さわぎ事は一人前

さる日、来迎寺からハイヤーに乗ったところ、聞るともなく話した運転手の言葉である。「片貝の人は変っていますね。お祭りなどの行事になると花火をあげたり、バカ騒ぎをやりますが、道路は一向になおりませんね。しかも目抜のこの町の通りなどは、舗装したところと砂利道があって走るのに困っています。もっと山奥の農村へ行っても道路は綺麗に舗装してあります。町の人たちが勝手バラバラで協力しないのでしょうかね」

（投書）

日立電動工具ストール店
各種木工用電動具
鋲打銃ヒルテー
大工道具・建築金物
井ゲタヤ商店
小林敬司
東京都江東区北砂町4丁目40−9
電話東京（644）2562

高級木製建具・襖
アルミサッシ
一式請負
有限会社　コミヤ
代表社員　小宮幸雄
東京都品川区豊町6−28−20
電話東京782−7538

三菱石油株式会社
大協石油株式会社　販売店
有限会社　藤塚商店
代表社員　藤塚栄三郎
住所　東京都墨田区太平4丁目17−2号
電話東京（625）代表 2935−7
倉庫　東京都墨田区太平4丁目16−3号

▽▽片貝城趾縁起考△△

このたび小千谷市当局の配慮で「片貝城趾等管理委員会」なる観光開発団体が設置されたのを機会に、いささかこれらにまつまる縁起資料をつぎにまとめてみようとおもう。若い世代たちのため参考とならば幸いである。あえて郷土考証史家によって他日充分の調査をとげられんことを希望しておく。

はるかなる大古、古志（越）の国の一部、三島（山東）は、寺泊、出雲崎、与板、関原、片貝小千谷、対岸の長岡、（加茂）青海などは信濃川の河口である川口（信濃川と魚沼川の合流点）までに渉る内海に面した沿岸地帯であったという。

中古には阿部比羅夫の蝦夷地東征のおり、出雲崎は舟の仮泊した場所として知られ、出雲の国とは海路の交通がひらけていたと伝えられている。

縄文式、弥生式時代における先住民族の生活を語る石斧、やのね、かわらけの類が、大正の初期ころまでは、三島郷の各所で土中から発見された。

片貝郷はかつて山城の国（京都）愛宕神社の社領であり、元大貝郷浅原荘に属していたと伝えられる。

降って足利時代の末から（室町幕府）戦国の動乱期に入るのであるが、片貝城趾は当時、片貝郷にあった豪族、片貝式部丞房忠の居城の跡といわれる。

式部丞はさきに謙信が古志、蒲原、三島を支配するにおよびその麾下となったが、謙信の歿後、景勝と景虎の相続争いのおりは景勝側にくみして所領を守った。

数々の合戦には謙信に従って武功があり、天文二十三年の川中島合戦には春日城の留守役を引受けるほどの信頼を得た。また弘治二年の川中島出陣（第2次）の際は殿りとなってよく奮戦奮闘したという。式部丞の歿後、その子の能運があとを継いだが、天正十年に能運は、中頸城の宮内鮫井城に移り廃城となった。その遺跡を「城の腰」と称している。

その頃築かれた濠の名残りであろうか、崩れた堀割に、僅かながら往時の面影をしのぶことができる。

場所は境川の水源地附近、栃尾ざわのふところ、背後に西山を控えた丘陵の突端、五〇米ばかりの懸崖が自然の防壁となっている松林の一帯である。

前方は信濃川を挟んで金倉山塊と対峙している。右手は視野がさえぎられているが、小千谷、薭生城（平子氏）神谷荘の連絡はとれぬことはない。やや左寄りに長岡（栖吉の長尾家）蔵王堂、栃尾（本庄）など最左手は揚北衆といわれる三条以北の豪族（中条藤資）与板（直江）軍兵の動静が遠望される。ここで「のろし」をあげれば、小国郷の豪族たち、それより安田、琵琶島（宇佐美定行）に合図が伝わり、米山を越えて春日山城に届くというのが、ひとつの勘ぐり判断である。

しかし居城といってもせいぜい雑兵ども二〇〜三〇人くらいがたむろしていたに過ぎないのではなかろうか。むしろ居住屋敷は山つづきの十三畑あたりにあったのではなかろうか。

つぎに三島郡誌（昭和十二年十一月刊行）に誌された一節を転載しよう。

「村の西に隣村に行く峠がある。裏無峠といっている。上杉謙信の家来、片貝式部がその山上に城を築いていた城跡が残っている。

その頃今の焼山あたりは一面立派な城下町で、その町の人々は、城主が五月の節句に使う幟布を織る事を作って暮していた。

それでこの附近を守屋敷とも言った。然るにこの城も敵に攻められ、町には火を放たれ、全町は火の海となり、山も野もうずまくる火焔に包まれた。その後この城下を焼山と言い、住民も又前のように沢山戻った。近年新道が出来てどんどん家が新しい道の方に移った。町の名も麻守（お）を作ったところから守屋敷という、今も焼山の附近から大石や瀬戸物の破片などが時々出る」。

上記の記述から、つぎのようなことが考えられる。

片貝式部は実在の人物であること、焼山の呼び名は、やはり火災があった事実を裏書きしているものであろう。ただし立派な城下町であったかは疑問がある。しかしあの地域は鴎の巣を経て神谷、小千谷への往還（弥彦街道）であったことには変りはなく、現在の小栗田原を経て小千谷へ至る県道は明治も中期ごろになってひらけたものであろう。

守屋敷は現在の大屋敷であり、いつか麻苧の栽培や加工仕事が衰退して消滅したので、語呂が転化したものであろう。俗に天王様といわれているところがその本拠あたりではなかったであろうか。

青苧（お）座の公（く）事といわれ、そのころ上杉同族たちにとって最大の税収入となっていた。

その後約四五〇年を経て片貝製作所などの工場建築が行なわれ出したのは奇しき因縁かとおもわれる。

仲使山招魂場のこと

日露戦争（明治三十七、八年）の直後、片貝の出征軍人を会員に尚武会が設立されたのを機会に山の中腹をひらき、当時の出征者一六八名の姓名を石碑に刻み、従軍記念碑と忠魂碑を立てた。以後戦前（第二次世界大戦）まで毎年八月一日には神官の修祓の儀があり戦歿遺家族を招き高等科生徒などが参列して昼夜にかけ、賑かに祭典が挙行されていた。

三尺玉の打揚げ

片貝にはじめて三尺玉が打ち揚げられたのは、明治二十四年の秋の大祭であった。

九月九日に二本、十日に二本、合計四本である。

第一発目はすわれ、第二発目は上出来、第三発目はすわれ、第四発目が上出来と記されている。

由来、片貝の花火は近県はもちろん、東京あたりの好事家にまで知られていた。

明治の落語界に名声の高かった三遊亭円朝がたまたま越後に来遊した途次、三尺玉の話をきいてわえて片貝にやってきた。夜に入り第一発目の揚がるをおそしと待っていたところ、運悪くすわれとなり、あきらめて新潟方面に向わんと旅宿を出て約小半時（一時間）経ったと思うころ忽然として天地を揺がす大音響が起り、西方の空にひるを欺く光りが閃めき、百花の一斉に開くに似た花火が望まれたと述懐している。

信濃川を舟便で下るため、釜ヶ島に向う道すがら池津か岩野の原へかかったころあいだったかとおもわれる。

当時、片貝の花火は三河花火と双璧をなしてその技術を天下に評価されていた。また花火がめしより好きだという名人かたぎの花火製造人がいた。三尺玉の打ち揚げはこれらの人たちの腕くらべの競演の感があり、その熱意に動かされて寄付もあつまったものと考えられる。しかし二十四年の結果を知った人たちは翌年には経済的な後援もつづかず、結局一発だけあげてあとを絶ったのである。

現今では三尺玉のうちあげなどは宇宙衛生ロケットの発射される時勢となり技術的には全く問題とならない。

また経済的にも酒、麦酒類、菓子（羊かん衣がや）などの市場が他にさきがけて全国に雄飛していた時代であったから、人気としてもさかんなるものがあった。

秋祭りとなれば近在近郷の人たちが多数見物にやって来て、神社の境内など野宿して夜を明かし、終夜を徹して賑わったものである。

一ノ丁、寺町の老人クラブ
仲宇山に桜を植樹

昨秋十一月下旬、第一弥生会（山口太一郎会長）寺町弥生会（本田国次会長）の両老人クラブの人たちが、仲使山（招魂場）一帯（鐘塚を含む）に桜の苗木五十本を植えた。

この日は久しぶりの好天気に恵まれ、約三十名のひとたちが参加したが、「もうわしらの代にはみられんだろう」「いや百まで生きれば花見ができるさ」とかレクリェーションをかね冗談口をかわしながら植えおわったあと広場にむしろを敷き、東京片貝会の寄進の休憩所を利用しながら、きのこ汁に酒を汲みかわしたのしい一日を過した。

（老人クラブ連中記念撮影）

芝桂七さんの美挙
浅原神社に深井戸寄付

昨夏は三十年ぶりの日照りで片貝の町では方々の井戸が涸れ、貰い水をする家が多数あらわれたが浅原神社境内のみたらい場も水なしの神泉となった。芝桂七さんは生家が浅原神社の鳥居正面に当りかねてから敬神の念が厚くこれまで同神社にいろいろと篤志寄付を行なってこられたが、この有様を憂い、新らしく拝殿わきに深井戸を掘ることを発起され、浄財約六十万円を投じ工事を進められていたが、昨秋末完成した。芝桂七さん寄進によって浅原神社のご用水の危機は解消して今後はこと欠かぬことになった。（写真は同工事現場）

（井戸工事現場）

声
離京者と郷党人と
ある「はんぱつ者」の電話

昨年（昭和四三年）九月のある日の朝、東京片貝会の事務担当者のHさんが出勤早々に電話のベルが鳴った。

「私は川崎の小杉におる大矢である。郷里の片貝からヤレお祭りの花火だ、中学校二十周年の記念事業の寄付金だと、いかにも寄付せよといわんばかりの勧誘状をおくってくるが、私は片貝を出郷以来一度も片貝の厄介になったことがない。それをさも当然のように催促がましくいってくるのがシャクでたまらない。」

電話の主は激こうして怒なりたてている。余り唐突なのでこちらもぐっときた。「もし東京片貝会に不満があるなら、事務所に来るなり、幹部の人に会って話して下さい。私の知る限りでは、皆さんいずれも忙しい仕事のある中を、無報酬で郷里の関係であるとの理由だけで働いておられます。もしご不要ならば今後は会報も送りませんよ」と応答したところ、「いや失敬、失敬」と言いながら電話を切った。

このことで考えさせられるのがやはり片貝の人たち（多分一部であろうが）の態度ではなかろうか。それは戦前は四十年、五十年以前の離郷者には郷土人との間には生家を中心に何かしら温い人間的交流があったが、最近は戦後の人たちとの間に大きな相違というか、ズレがある。変らぬのは片貝の一部にはびこる郷土出身であれば寄付を貰うのは当然だとする考え方である。

こうしたことに今後は郷里の有識者は十分に反省してもらいたいものである。（山岸生）

趾は址にかえよ

片貝城趾の趾は元来が足に由来しており、くるぶし以下の足もとなどを意味し、転じて城の土台などを言う。現在では当用漢字どころか制限外の死語化している。したがって趾は址に改めるべきであろう。ここに片貝城趾等管理委員会の一考を煩したい。

（M生投）

昭和四十三年度収支決算報告
自昭和四十三年一月・至同年十二月

収入の部	
繰越金（前年度決算繰越金）	九三、二五三円
四十三年度一般会費	三四、五四五〃
寄付金（総会寄付を除く）	一二、〇〇〇〃
会報六号広告料	四一、〇〇〇〃
諸会合残金繰入	三一、二三六〃
銀行預金利子	二、七八九〃
合計	二一四、八二三円
支出の部	
通信費（会報発送分）	六、四三五円
同（総会その他一般）	一一、九六〇〃
印刷費（会報印刷費）	三〇、六九九〃
同（その他印刷物）	一〇、六〇〇〃
事業費（寄付、見舞、慶弔費共）	三五、二一〇〃
会合費（交通費、旅費を含む）	二二、五七〇〃
事務費（一般事務費、事務所費編集費、事務係手当、雑費）	二六、五五五〃
余興費（第九回総会出演者交通費その他雑費）	一九、八〇〇〃
合計	一六三、八二九円
差引残高（新年度へ繰越）	五〇、九九四円

右の通り収支決算報告致します

昭和四十四年一月

東京片貝会　会計委員

会員各位にお願い

最近、住所標示変更による新町名番地の通知がありませんため、配達上に差支えがあり困っております。変更のおりは必ずご通知願います。なお毎度のことながら会費未納のお方は、ご厄介でも同封振替用紙ご利用の上郵便局へお払い込み下さい。

係より

会費（一ヵ年分）金二百円也

Tea Room

まるやま

東京都港区赤坂新町1－12
電話　東京（583）2303
地下鉄赤坂見付駅下車3分

ゴム印・印章・名刺
日本銀行御指定
安達温古堂
安達喜作
東京都港区六本木6丁目2番24号
電話東京 408－5069

自動車・電気機械
各種精密ねじ製作販売
株式会社 安達螺子製作所
代表取締役 安達宗吾
東京都港区三田1丁目九番13号
電話東京 451－1604